（1）2023年2月3日（金）1面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆冬フェスで柏崎盛り上げ

冬フェスで柏崎盛り上げ

まちからで11日　産大生らが企画

大学生が地域の人と柏崎の冬を盛り上げようというフェスティバル「柏崎の冬を若者の力で盛り上げ隊」が11日午前10時半から、市内西本町3の市民活動センター「まちから」で開かれる。主催は「まちかど研究室@新潟産大」。ステージ、飲食、出店、体験、学びなどを繰り広げる。

冬のフェスは2020年1月以来2回目。参加は同大部活動（茶道部、写真部、書道部）の出店のほか、新潟工科大「動くスライムづくり」や新潟大の活動展示など。市内店は平田表具店（時絵〈まきえ〉コースターづくり）、いろはや製餡（あん）所（出張販売）、FREKFREK（食品サンプルつくり）。ステージ発表は午前10時50分からよさこい（新潟総踊り連風雅）、11時半からキッズダンス（nao dance school）、午後1時から吹奏楽（産大附属高・産大コラボ）。抽選会は午後2時半。終了は午後3時。

まちから駐車場の混雑時はみなとまち海浜公園の利用を呼び掛けている。

柏崎日報社転載許可済

◆「柏崎の研究」発表21日

工科大と産大　若い視点・発想で

「柏崎の研究」発表21日

工科大と産大　若い視点・発想で

柏崎商工会議所総合建設部会（阿部尚義部会長）が21日午後5時半から、新潟工科大、新潟産大の学生による「柏崎に関する研究発表会」を開く。市と工科大、柏崎商議所連携協定事業の一環。会場の同商議所またはオンラインで視聴できる。主催はほかに県建設業協会柏崎支部、柏崎建設業協同組合。

発表会は、柏崎の二つの大学で勉学に励む学生が、柏崎に関するテーマについて研究した成果を報告する。「柏崎をより住みよい街に」「柏崎を活性化させるために」のテーマで、若い学生ならではの視点・発想から提案してもらう。また柏崎の未来を考える上でのヒントも期待される。終了は7時半。

会場視聴（商議所大研修室）は定員30人。オンライン視聴（Zoom利用）は定員80人、いずれも無料、先着順。申し込みは13日までに所定の申込用紙で、オンライン視聴（メールアドレス記入）か会場視聴を明記し、商議所中小企業相談所（電話22・3161、ファクス22・3570、電子メールyamada@kashiwazakicci.or.jp）へ。

研究発表は次の通り。

【工科大】退職後の高齢者の暮らしと充実度に関する研究（修士論文）＝大学院2年・小林隼人▽柏崎市全域におけるコンパクトシティの提案＝工学科3年・高橋望▽農村地域における関係人口を取り込んだ活性化策の検討－柏崎市中通地区を対象とした実践－＝同4年・松尾翔馬▽バケツ稲づくりの施肥・生育管理に関する動的教材の開発＝同・権田光貴▽出雲崎で交わり、生み出し、そして広がる－妻入りの町出雲崎における現代の廻船（かいせん）問屋の提案－＝同・蕪木太雅

【産大】地域における交流拠点としての「小さな観光」に関する考察～新潟県柏崎市を事例として～＝文化経済学科4年・樋口萌香▽新潟県製菓企業3社の経営分析－理念、製品、グローバル化、社会貢献＝経済経営学科3年・岩田桜也・奥野飛龍▽柏崎市高柳町の耕作放棄地再生（森林化）事業＝文化経済学科3年・小林大祐・忠青翔▽まちかど研究室2大学共同プロジェクト「ご当地すごろく　かしワンダー～柏崎市を駆けめぐれ！～」＝文化経済学科4年・杉田有紀奈、経済経営学科4年・橋本竜平▽水球のまち柏崎をさらに盛り上げる～産大生目線の企画と学んだこと～＝文化経済学科2年・渡辺秀

柏崎日報社転載許可済

◆大学生の力で柏崎盛り上げ
冬フェス多彩に

大学生の力で柏崎盛り上げ

冬フェス多彩に

大学生が地域の人と柏崎の冬を盛り上げようというフェスティバル「柏崎の冬を若者の力で盛り上げ隊」が11日、市内西本町3の市民活動センター「まちから」で開かれた。飲食や体験ブース、ステージ発表などでにぎわった。主催は「まちかど研究室@新潟産大」。

会場では同大の書道部、写真部、茶道部の体験のほか、ふふ豆ご飯、タピオカミルクティー、おでん、焼きそばの飲食ブースも出店。新潟大の活動発表、新潟工科大のスライム作りのブースもあった。よさこい、キッズダンス、産大附属高吹奏楽部の演奏でステージを盛り上げた。

向陽町の長岡慶美さん(32)は李紅ちゃん(4)と琴葉ちゃん(7カ月)と訪れ、「まちからに来たのは初めて。この時期は出掛けにくいが、にぎやかで楽しい」と食品サンプルのミニパフェ作りを楽しんだ。キッズダンスに出演した荒浜小4年・柳真莉凪さんは「会場は人がいっぱいで緊張した。ポテトがおいしかった」と笑顔。

イベントを企画した一人、新潟産大4年・本間陸斗さんは「天気も良くて、予想以上の人が足を運んでくれてうれしい。冬フェスは3年ぶりで今回が再スター

大勢の人が詰めかけた冬のフェスティバル＝市内西本町3のまちから

柏崎日報社転載許可済

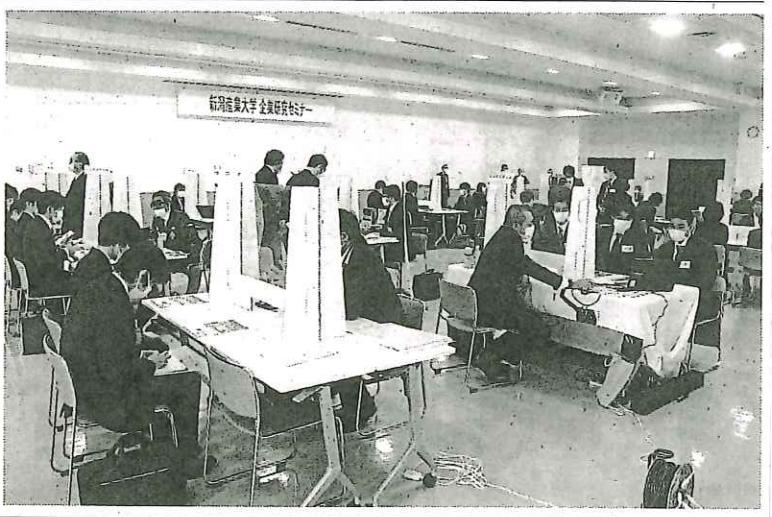
◆企業セミナー初めて学外で　新潟産大

企業セミナー初めて学外で

新潟産大

3月1日から本格的に就職活動が開始されるのを前に、新潟産大（梅比良眞史学長）は7日、産文会館で企業研究セミナーを開いた。学外施設での開催は初め。3年生約50人が就職担当者から説明を受けた。

セミナーは毎年2月に行われ、昨年初めての学外開催を計画したが、新型ウイルス感染拡大のため中止となり、2年ぶり。経済経営学科の石倉美優那さんは「リクナビやマイナビなどの合同説明会は新潟市内なので、こういう機会が柏崎であり、ありがたい」と4社を回った。文化経済学科の小泉健太さんは「第一志望は公務員だが、各企業からいろいろ学べた。リクルートスーツに袖を通すと気持ちが引き締まる思い」と緊張した面持ちで語った。



初めて学外で開催した新潟産大の企業研究セミナー＝産文会館

参加した30社・団体の中には同大卒業生のリクルーターも。昱工業（新潟市）の斉藤千紘さん(23)＝2021年卒＝は「仕事内容や就活についても積極的な質問があり頼もしかった」、スワロー工業（燕市）の五十嵐李菜さん(23)＝22年卒＝「私の時もそうだったが、緊張していると思うので親しみやすい雰囲気づくりに気を付けた」と話した。

同大就職委員長の橋本次郎教授は「なるべく早い時期に企業担当者と直接会うことは就職指導する上でも有益」と3年生を見守った。

柏崎日報社転載許可済

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

地域活動を学内で共有～地域理解ゼミⅣ合同発表会～

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

―実践活動レポート―

地域活動を学内で共有

～地域理解ゼミⅣ合同発表会～

地域理解ゼミは「地域文化」「企業経営」など6分野に分かれて学ぶ2年次の必修科目だ。今年も1月下旬に各ゼミナールで研究した内容を発表する合同発表会を開催した。

他分野のゼミナール活動の課題への取り組みやアプローチなどを聞くことで刺激を受け、ゼミナール活動全体の活性化を狙うとともにプレゼンテーション力の向上も図っている。

大石ゼミナール（地域企業経営分野）は、「地域と企業戦略～キューピットバレイとスマイルリゾート～」をテーマに発表した。ゼミ活動でキューピットバレイを訪れ、運営に携わるスマイルリゾート（湯沢町）から、年間入場者数の推移、集客への取り組みなどを調べ、コロナ禍におけるリゾート地の運営の現状把握と課題を発表した。

担当の大石友子教授は「ゼミでは企業経営の基礎知識と地域との関係について学んでいます。地域と産業の関わりとして、①特産物を活（い）かす②蓄積された技術を活かす③自然環境を活かす等のアプローチの中から、今回は学生たちの希望で『自然を活かしたリゾート産業』に着目しました。開業以来の歴史、無雪期のキャンプ場運営の試みなどを伺い、学生たちにとって新しい視点や課題解決を考えるきっかけになったと思います」と成果を感じている。

発表した本間才揮さんは「スキー人口の減少や競合他社との差別化といった課題に対し、さまざまなアイデアを実践され、刺激を受けました。施設の魅力アップと並行して、周辺産業と観光を横断的につなぎ、地域全体の魅力を上げることで集客や雇用に結びつけることが大切だと感じました」と話してくれた。

こうした学びから未来の「地域リーダー」が育つことを期待している。

（同大学地域連携センター）

（6）2023年2月24日（土）1面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆産大レクチャー　ア・ラ・カルト〈184〉

企業変革の枠組み　高橋成夫　教授

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈184〉

企業変革の枠組み

高橋　成夫

大規模な企業変革とは、企業全体であれ、事業部門、作業グループ単位であれ、戦略の大転換、文化の変革、グローバル化、Eビジネス、新技術の導入などに取り組むことである。変化の激しい激動の時代にあって、変革に失敗することの影響は計り知れない。企業変革を実現するには、どうすればよいのだろうか。

経営学者コッター（J.P.Kotter）は、大規模な企業変革に成功した多数の事例を調査し、企業変革が成功するためには、次のような8段階のプロセスを経る必要があると指摘している。

企業変革の第1段階は、関係者の間に「何とかしなければ」という危機感を植えつけ危機意識を高める段階である。第2段階では、変革の旗手を集め、変革を推進するためのチームをつくる。第3段階では、変革推進チームが、変革を導くために新しいビジョンを掲げ、このビジョンを実現するために戦略を策定する。そして、第4段階では、その新しいビジョンや戦略を周知徹底する。社内に伝達するために、あらゆるコミュニケーション手段が活用される。

第5段階では、変革の行く手を阻む障害を取り除き、変革にそぐわない組織の構造やシステムを変更していく。変革には今まで遂行されることがなかった新しい考え方、行動が求められる。こうした行動に自発的に取り組むよう多数の人たちを刺激する。

第6段階では、短期的に目に見える形で成果を上げるような計画を策定し、実際に成果を上げる。その短期的な成果に貢献した社員に報いる努力をする。第7段階では、ビジョンに基づいて改善された成果を定着させ、さらなる変革を推進する。新たなスタッフを雇用し、訓練しながら変革プロセスを強化していく。

第8段階では、企業変革後の新たな従業員の行動を、企業文化として根づかせ、新しい業務のやり方を定着させる。うまくいったように見える変革も、案外脆（もろ）いものである。伝統の力で過去に引き戻されるのを防ぎ、新たなやり方を継続し強固なものにしなければならない。

これらの8段階のプロセスを無視して企業変革を進めてしまうと、企業変革が失敗に終わってしまう原因となる。

コッターによれば、これらの中で特に難しいのが、「行動を変える」ことであり、そのためには分析結果を示して理性に訴えるよりは、目に見える形で真実を示して感情に訴えることが重要であるとしている。なぜならば、変革に成功した事例では、「分析し、考えて、変化する」流れではなく、「見て、感じて、変化する」流れの方が強力だからだと主張している。

（教授）

＝毎月1回掲載＝

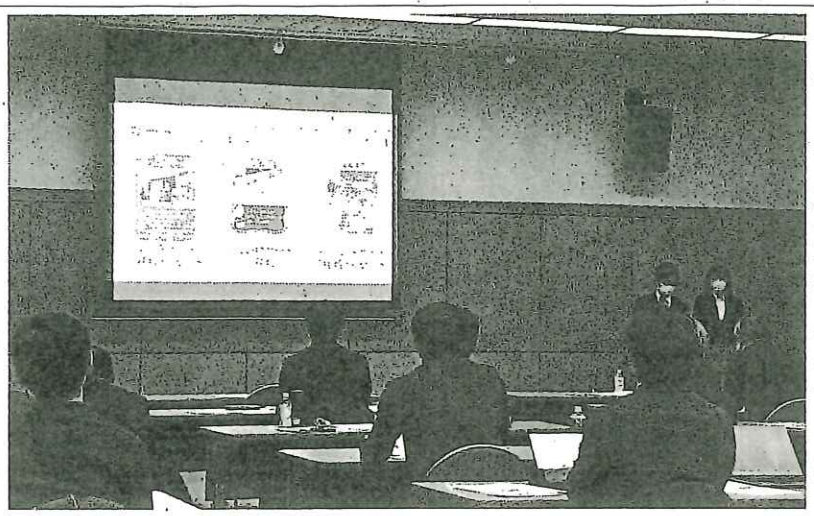
柏崎日報社転載許可済

◆「柏崎の研究」に10テーマ
工科大と産大生　研究成果を発表
最優秀「まち研」プロジェクト

「柏崎の研究」に10テーマ

工科大と産大生　研究成果を発表

最優秀「まち研」プロジェクト



柏崎商工会議所総合建設部会（阿部尚義部会長）の「柏崎に関する研究発表会」が21日、同商議所で行われ、オンライン視聴と合わせ、約70人が参加した。新潟工科大、新潟産大の学生が若い発想、視点で発表した。審査の結果、まちかど研究室2大学共同プロジェクトの企画が最優秀賞に選ばれた。

発表会は、二つの大学の学生が見た柏崎のまちや地域の活性化、これまで取り組んだ研究を発表する場として親しまれる。本年度で21回目。開会あいさつで、阿部部会長は「長い歴史があり、市も注目している発表の場だ。気楽に気合を入れてやってほしい。アウトプットする力は非常に大事。自分の力を堂々と発表してもらいたい。ぜひ地元に就職、定住していただきたい」と期待を寄せた。

10テーマの審査が行われた「柏崎に関する研究発表会」。最優秀賞となった2大学共同プロジェクトの取り組み＝21日、柏崎商議所

発表は10テーマ。退職後の高齢者を対象に行った暮らしのアンケートから、充実度などを考察した研究を皮切りに、次々と発表が続いた。両大学の教授ら4人が研究内容や新規性、社会性、提案力、プレゼン能力・資料工夫の点から審査に当たった。

最優秀賞の作品は、新潟産大文化経済学科4年・杉田有紀奈さん、同大経済経営学科4年・橋本竜平さんの「ご当地すごろく　かしワンダー～柏崎市を駆け巡れ！～」。本年度で11年目となった新潟産大、工科大の連携事業「まちかど研究室」の2大学共同プロジェクトとして提案された。

2人は新型ウイルス禍、活動が制限される中で、オンラインで会議を重ねた結果、柏崎のまちを模したすごろく形式のボードゲームの制作を決定し、本格的に活動を進めたことなどを発表。市内の施設や店舗に協力を求め、工科大はボードゲームの盤面やコマの作成、産大はイベントカードに各店舗のお勧め商品のデザインをするなど共同作業に取り組んだ。

ゲームには、地元の地域通貨「風輪（ふうりん）通貨」の要素を取り入れ、ボランティア活動に参加したり、柏崎の魅力を発見したりした人が勝ちになるように作った。2年がかりの完成に「さらに完成度を高めた上で、小中学生から大人まで多くの人に遊んでもらい、柏崎の魅力を知ってもらいたい」と期待を込めた。

優秀賞は「農村地域における関係人口を取り込んだ活性化策の検討～柏崎市中通地区を対象とした実践～」（新潟工科大工学科4年・松尾翔馬さん）、「出雲崎で交わり、生み出し、そして広がる～妻入りの町出雲崎における現代の廻船（かいせん）問屋の提案～」（同・蕪木太雅さん）。

会場の参加者、市内飯塚の吉田芳郎さん(61)は「どれも素晴らしい発表だった。視点が新鮮で分かりやすく、完成度が高かった」と関心を寄せた。同商議所では「貴重な時間を過ごしている学生たちの提案は、聞く側にとって大きな刺激になった。独創的な着眼点で、いいアイデアは興味深かった」と話した。